

ラビユダヤ教の 宗教原理と学の理念

市川 裕

エルサレム第二神殿崩壊（70年）後にディアスポラが本格化する過程で、ファリサイ派を継ぐラビの指導によってユダヤ法の自治社会が形成され、近代に至るまでこの体制が維持された。この宗教体制をラビユダヤ教 Rabbinical Judaism,あるいは規範的ユダヤ教 Normative Judaismと呼び、これを狭義のユダヤ教とみなすことができる。

ラビユダヤ教を成り立たせてきた宗教的原理は、唯一神との契約・それに基づく律法の遵守という聖書の契約思想に立脚しつつも、以下の3要素によって特徴づけられる。

1. 第1は二つのトーラーという信念である。神がモーセにシナイで啓示した教えには、成文律法 torah she - bi - khetavの他に口伝律法 torah she - be - al al peがあったとし、口伝律法は代々伝達されるだけでなく、新たな事態に対処する新しい掟までも内包する。トーラーに属す個々の行為規範を指してハラハー（Halakhah：道、定め、掟）と呼ぶ。ラビと呼ばれる法学者・賢者がかつての議決機関サンヘドリンを継承してユダヤ法伝承を整理・体系化し、生活のあらゆる領域において何がハラハーであるか包括的に示したものが口伝律法の集大成ミシュナー（Mishnah 西暦200年頃成立）である。これは、それまでの神殿儀礼、法制度、経済、生産、食生活などの広範な領域のハラハーを包摂する法伝承である。ミシュナーは全体が6巻に分かれ、順に種子、祭日、女性、損害、聖物、清浄である。元来は口伝であり、記憶力の良い賢者の記憶に収められたものを底本とした。

ミシュナーの欽定編纂は一時代を画することになり、ミシュナー成立までの賢者はタンナイーム tanna'im（教授者）と呼ばれ、ミシュナー以後の賢者はアモライーム amora'im（解説者）と呼ばれる。ユダヤ人社会はこの集大成を権威として共同体形成を行い、パレスティナとバビロニアの二大中心地で賢者を中心にミシュナーの註釈と応用が学問の中心となった。この学問をヘブライ語でタルムード、アラム語でゲマラ gemaraと呼ぶ。ともに学習を意味する普通名詞であるが、ミシュナー研究の総称として使われる。この学問がパレスティナとバビロニア

でそれぞれ集大成されたものがタルムードと呼ばれる著作であり、これが編集されるに及んで、ユダヤ人社会的自治の揺るぎない基礎が形成された。

2. 第2の特徴は学問の在り方に関係する事柄である。それはカバラ kabbalah,すなわち伝承である。これはモーセから連綿と続く口伝律法の伝承の連鎖である。天に発するトーラーはモーセからヨシュアへ、さらに長老、預言者、大会堂の人々を経てユダヤ賢者へ至ったとされる。伝承は先師の言行のみならずその心を伝えることを意味し、いわば無尽蔵であり、いわゆる師資相承によって弟子は師であるラビを継ぐ。学問の伝授は、各ラビの学塾と市井での教育、さらにはサンヘドリンと呼ばれる法廷、のちにはその両者の特徴を兼ねたような学問の殿堂としてのイエシヴァにおいて、継承・発展されていった。

3. 第3の特徴は学の理念であり、ラビとしてのモーセである。モーセはラビの雛形であり、荒野の40年間モーセに随順したヨシュアへのトーラーの相承はラビから弟子への相承の模範とされた。そこから「我らのラビ・モーセ Moshe Rabbenu」の呼称が生まれ、安息日を中心にシナゴークでモーセ五書は公式に朗読され学習は徹底された。ユダヤ人社会は、ハラハー Halakhahと呼ばれるユダヤ宗教法規によって生活の広範な領域を規定されるが、中世のディアスポラの拡大に伴って広く妥当する法的基盤が強く求められ、ハラハーの法典編纂が進んだ。律法学者はその生きた時代環境に触発されて、しばしば同時に哲学者であったりカバラ神秘家であった。彼らは法的な拘束により停滞した精神を高揚するとともに、近代にラビユダヤ教の自治社会を解体する内的要因ともなる。

イスラームにおける学の理念

鎌田 繁

イスラームはインド、ギリシアというような地域に基づく概念ではなく、それ自体ひとつの宗教に方向づけられた概念である。その意味で「イスラームにおける学」

はひとつの価値観に裏打ちされた営みである。イスラームの世界観の特徴は教義のうえでの「神の唯一性」(タウヒード)が、狭い意味での宗教の領域に限らず、人間のあらゆる営為にたいしても及び、すべてを神の支配領域に取り込もうとする点にある。すなわち、人間の活動は、身体的活動であれ、精神的活動であれ、すべて神を最高の権威として秩序づけられねばならない。その意味で、人間の知的活動である学問の営みは、神の人間に対する意図を、様々な状況のなかで人間が探り、知り、その意図に従った生を実現することにつながっており、最終的には神の定める理想的な人間像を体現し、来世における救済を実現するための方法にもなっている。知識をもつ者、学問に従事する者がとりわけ神に嘉される存在であることを示していると解される、「神はあなたがたのうち信仰する者や、知識を授けられた者の位階を上げられる」(58:11)というクルアーンの言葉や、「知識を求めて道を進む者には、神は楽園への道を整える」(ムスリム)という預言者ムハンマドの言葉は、イスラームにおける学、知識(ともにアラビア語でイルムと表現される)のもつ位置の高さを示唆している。

学問の分類はさまざまな立場から行なわれている。代表的なものにフワーズミー(d.997CE)*の分類がある。それによれば、イスラーム固有の学問と外来の学問とに大きく二分する。固有の学問とはイスラームの啓示に基礎をおく種々の学問分野を指し、シャリーア諸学、アラブ諸学ともいわれる。これに数えられるのは、法学、神学、文法、書記学(書記が知っていなければならない知識、それぞれの役所の業務やそこでの特殊な用語など)、詩及び韻律学、伝承(諸民族の歴史)の6である。他方、外来の学はギリシャなどから継受した諸学問を指し、哲学、論理学、医学、数学、幾何学、星学、音楽、機械学、錬金術の9を数える。

イスラームの啓示は神が語った言葉そのものであり、預言者ムハンマドは単にその言葉を一言半句違えることなく人々に伝達しただけである、と考えられている。そのためクルアーンに書かれている言葉はすべて神が語った言葉となる。それ故クルアーンの言葉を正しく理解し、神のメッセージを正確に知ることがムスリムにとってもっとも重要な課題となる。

人間は主である神の下僕である、というのがイスラームの人間観の基本であり、理想的な人間とは神の欲するままに生きる者であり、そのために神がなにを人間にのぞんでいるのかを知ることが重要となる。クルアーンには人間の行動を律する言葉が散見しており、それらの言葉を基本的な拠り所として、人間の行動のあるべき姿を体系的に構築する学問が法学として発展した。フワーズ

ミーの分類で第一に挙げられているように、法学はイスラームのもっとも中核に位置する学問とされている。何をどのように信じるかという点を探求する学問に神学があり、後世精緻な理論を展開させてきたが、イスラームにあっては神学は法学ほどの重要性をもたなかった。クルアーンや預言者の伝承をそのまま受け入れるのが信仰のすべてであり、それについて細かな詮索をすることは異端的な行為であるとする強固な伝統主義の潮流が存在していたからである。イスラームにとって、どう行動するかという法学的関心の方がどう信じるかという神学的関心よりも重要であったのである。

クルアーンは7世紀初頭のアラビア語で記されているので、その言葉を正しく理解するために言語の研究が不可欠になる。語彙、文法、クルアーンの同時代資料として価値のある詩の研究、さらにクルアーンの個々の啓示が下された状況を考察する学問分野も生まれ、それは歴史学に発展する。

クルアーンの啓示に直接関与する法学や、啓示の理解に補助的役割を果たす文法学などの学問がアラブ固有の学問とされる一方、外来の学とされるものは、哲学、医学など主としてギリシャの遺産を継ぐ学問である。哲学に代表されるこれらの学問は人間理性の役割を重視するものであり、啓示に基づく学問に従事する人々に、啓示を蔑ろにする危険な学問とみなされることもあった。しかしながら、一部の哲学者を除いて一般的には理性と啓示は一致すると考えられていた。イスラームの啓示に直接関与する知識ではないが、自然界の秩序を知るとは神によって創造された被造物についての知識を探ることであり、間接的に神や神の働きを知ることになる。神の働きは単に神の啓示に現われるだけでなく、創造行為を通して被造物全体に及んでいる。それゆえ、外来のものと考えられる学問も、被造物の何かを対象としている限りにおいて、最終的には神に至る知識を扱うものと考えることができたのである。

イスラームにあっちはいかなる形態の学問的営みも、直接的にであれ、間接的にであれ、神を知ること、あるいはその知に貢献することが究極的なねらいである。このような特徴をもつ営みである学問に従事することは、それ自体、救済論的な意義をもつ信仰の行為と考られるのである。

(*) Abū 'AbdAllāh Muḥammad al-Kātib al-Khwārizmī, *Mafāṭīḥ al-'ulūm*, al-Qāhira, 1401 AH/1981 CE. 基本的にこれと同じような仕方、イブン・ハルドゥーン(d.1406CE)も、伝統的学問と哲学的/知性的学問とに大きく二分することで、学問を整理している。(『歴史序説』第6章参照)